

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 女囚騎士 セピア

小説 羽沢向一

挿絵 あめいすめる

第一章 辺獄への道程

第二章 辺獄砦の支配者

第三章 崩落する女騎士

第四章 魔淫鎧の激闘

008

070

102

179

## 登場人物紹介

Characters



### セリシア

グラルダン王国軍親衛隊第三分隊長。名門だが勢力の衰えた騎士の家の一人娘。剣の腕が確かなうえ、剛毅木訥かつ高潔な人柄で、部下からの信頼が厚い。

### ガルチク

グラルダン王国軍親衛隊総隊長。壮年にして筋骨たくましい優秀な戦士だが、野心家の一面も。

### ヴァーラ

ガルチクの部下で愛人の女魔道師。

### ゾーゲム

辺獄砦の実質的リーダー。もとは野盗団の首領。

### ベデュート

辺獄砦の一員。善悪や利益に無関心で、好奇心だけで動く変人。

こう怖いと教えられた。

セリシアの前に囚人が持ってきたものは、二本の棒の上に、木製の大きな三角柱が横倒しになっていた。とがった部分を上にした三角柱の一カ所には、やはり木製の男根をかたどったものがそそり立っている。実物の男のものとは違って、木造巨根の表面にはぶつぶつとしたいぼがびっしりと覆っていて、禍々しいまがまが異彩を誇った。さらに三角柱の左右の側面には、革の輪と、いくつもの横棒が付属している。

ゾーゲムが三角の輿の側面を叩いて笑った。

「これはな、辺獄砦から逃げ出そうとした娼婦を罰するための道具だ。俺たちの先輩が造ったんだが、これに乗せられた女は必ず泣きわめいて、許しを乞う。これぞ辺獄砦名物、人呼んで泣き神輿だ。もちろん、セリシアちゃんにたっぷりとお乗りいただくぜ」

「ば、馬鹿なことはやめろ」

「先人の知恵を、馬鹿呼ばわりしてはいかんなあ」

セリシアの身体が、ゾーゲムの両手で持ち上げられた。そのまま泣き神輿の作り物の勃起の上に運ばれる。

「やめろ。手を離せ、ゾーゲム！」

他の囚人たちが、セリシアの腰を締めつける黒い革のベルトを切り裂き、取り去った。両足を別々の囚人につかまれ、大きく広げられる。きつい拘束から解放された女の秘部へ、

男たちの欲望丸出しの視線が集中した。

「おいおい。すごいことになってやがるぜ」

「ガキのくせに、とんでもねえ淫乱な牝肉だぞ」

「俺はセリシア隊長を尊敬申し上げていたのによ。幻滅したぜ」

「ぎゃははははは！」

囚人たちのわざとらしい蔑みの言葉が、股間へとぶつけられた。卑猥な野次だけでなく、鏡を持ってきて、セリシアに下半身を見えるようにされる。

「これは！」

セリシアは絶句してしまった。これまでの人生において、着替えや入浴で自身の女の部分が目に入ったことは何度もある。いつも、そこはぴったりと閉じていた。魔成術で性欲を消されていたセリシアには、それがあたりまえだ。

今のセリシアの女は、まったくの別物となっていた。子供の身体になったというのに、そこには淫らな生物が潜んでいる。媚成分にたぶらかされ、革のベルトに剝られた肉唇は、恐ろしいほど充血して、ぷっくりと盛り上がっている。しかも自分から左右に広がって、いつもはけっして見えない肉襷がすべて覗いている。こんなひらひらしたものが自分の身体に存在したなんて、思いもよらなかった。

複雑な形状の中心には、二つの穴がひくついて、奥からとろとろと透明な汁を吐き出し

ている。すでにセリシアの中から出てきた液体は、股間全体をじつとりと濡らし、囚人に握られた両脚の内側を伝い落ちていく。

そして、もうひとつ、よく目立つものがあつた。薄い皮に根元を包まれた肉の突起が、ずきずきといきり立っている。ろくに知識のないセリシアにも、そのふくらんだ肉粒が強烈な疼きの中心のひとつだと理解できた。もしそれに触れたら、恐ろしいほどの快感が生まれると予感できた。予感できるからこそ、ふつふつと憤りが湧いてくる。

(どうして、こんなものが、わたしにあるのだ。わたしには女の快楽を生み出すものなど、なにも必要ないのに。こんなものが存在するから、弱みをさらすことになったのだ)

「自分の淫乱さがわかったか、セリシアちゃんよ。今からその貪欲な牝穴を、太いものでふさいでやるぜ」

ゾーゲームが自分のもので陵辱したときと同じく、無造作にセリシアの身体を泣き神輿の上に落とした。並の男のものより雄大な、しかし血の通わない亀頭が、開いた肉孔をさらに押し広げた。

「きっひいいいっ！」

セリシアの体重そのものが、悪夢の責め具の効果を發揮させる。限界まで広げられた陰壁を、木製肉棒の表面のいぼいぼがかきむしった。

「ひっ、ひいっ、くああああっ！」

責め具が完全にセリシアの中に埋まり、泣き神輿の三角柱の頂点に股間が密着した。膣口から肛門に至る柔らかい肉に、木の頂点がぎりぎり食いこんだ。

すぐさま囚人たちが、セリシアの左右の足首に、泣き神輿の両脇についた革の輪をはめた。これで膣から肉棒を抜くことも、泣き神輿から降りることもできなくされてしまった。「ひひひひ。責める仕掛けはこれだけじゃあないぜ」

器用な囚人の指が、セリシアの股間に食い入る泣き神輿の頂点をまさぐった。そこには一本の細い紐が生えていた。囚人が紐をつまみ、手早くセリシアの勃起した肉芽の根元に巻きつけてくる。

「はううっ！ そ、そこは、あおおう！」

女の一番過敏な部分を紐で縛りつけられて、セリシアは身じろぎすらできなくなった。股間と膣への食いこみをやわらげるために、足で三角柱の側面を挟んで身体を持ち上げようとすれば、即座に陰核が紐で引き絞られてしまう。それどころか、今や息をするのさえ、女芯を締めつけるものになった。

「ほどけ！ 紐をほどくんだ！」

声が膣と肉芽に響くのをこらえてのセリシアの必死の訴えを、ゾーゲムが笑い飛ばした。「ふははは。なにを言ってるやがる。これからがいいところだぜ。野郎ども、親衛隊分隊長様をかついで進軍だ！」

「おおうっ！」

囚人たちが威勢のいい勝鬨かちどきをあげて、泣き神輿の二本の棒を持ち上げた。セリシアを乗せて、三角柱がどんと舞い上がる。もちろん上のセリシアは、膺を木造巨根にえぐられ、肉芽を紐で繋られる。

「こおっ、ふおああああっ！」

（こんな、こんなことが）

苦痛はなかった。女体の最も敏感な部分を強烈に虐待されても、セリシアは苦痛を感じられない。あるのは気が遠くなるような快感だけだ。媚薬魔成獣に冒されて、セリシアの肉体は未成熟な子供のものでありながら、官能の塊にされている。今なら膺に灼熱の刃を突き入れられても、悦楽に浸されてしまうに違いない。

「そうれ、行くぞっ！」

囚人たちが泣き神輿の棒を肩にかつぎ、身体を上下に揺らして前へ歩き出した。

「ひつきいいっ！」

最初の一步を踏み出されたとたん、また新たな官能の一撃がずんと響く。肉洞を埋める木柱が上下左右に動き、新たな角度でセリシアを突き上げる。

細紐で縛られた肉芽も、ちぎれるほどに強烈に引かれた。根元を締め上げられて、女心がいつそう赤く腫れる。膨張を強制されて、セリシアの感度がさらに上昇していく。

「あふうっ、はっ、はあああっ！」

(こんな恥さらしな快感を味わうくらいなら、苦痛にのたうつほうがましだ)

セリシアは無意識に過去の記憶にすがった。幼いころ、椅子に座った父から何度も何度も木剣で打たれた痛み。山中で修業していたときに、崖から落ちた激痛。戦場で身を斬られ、矢を受けた傷の熱さ。苦痛はセリシアの戦士として人生の伴侶。生きていく徴だ。

しかし、どれほど過去の痛みを鮮明に思い浮かべても、現実の快楽に身体も意識が流されてしまう。

「それ！」

「それ！ それ！」

「それ！ それ！ それ！」

「セリシア隊長のお通りだ！」

囚人たちが調子のはずれた蛮声を合わせて、セリシアが乗った泣き神輿をかついで広場をぐるぐると巡った。手の空いた囚人たちも、両手を叩き、足を踏み鳴らし、剣や薪や鍋や食器など音のするものをなんでも打って、馬鹿陽気に囃したてた。

囚人たちが巻き起こす熱狂のなかで、少女セリシアの裸体が上に下に、右に左に、縦横無尽に振りまわされる。涙と、汗と、そしてぎちぎちに広げられた肉花からあふれる女蜜が飛びちり、浮かれ騒ぐ男たちの頭に降りそそいだ。





セリシアはぼんやりと意識した。生まれて初めて性の快楽を味わう女騎士は、歡喜の頂点があることも知らない。ただ、自分が得体の知れない高みへ向かっていくのだけがわかる。

わけもわからず神輿の上でもがくセリシアの耳に、ヴァーラの艶々した笑い声が入った。「うふふふふ。セリシア様、そろそろ絶頂を迎えようとされているのでしょうか」

「あつ、はああつ」

（あああ、なんだ、絶頂とは）

「男が射精をするように、女も肉の悦びが極まると、絶頂というものを迎えますのよ。殿方によつて絶頂に導かれることは、女にとつて一番幸福なことなのですわ」

「な、なにを馬鹿なことを、んうっ、んあああつ！」

百戦錬磨のヴァーラが見抜いたごとく、セリシアの肉体は限界に来ていた。泣き神輿が前へ進むたびに、頂上へ向けて突き上げられ、セリシアの生涯最初の絶頂がすぐ目の前に迫っていた。

（くる。なにか、やってくるっ）

セリシア自身にも、もう肉体がどうにもできない領域に入っていることがわかった。

「あひっ、あつ、あああ、いやだ。ヴァーラの思い通りになるなど、いやだっ、はひいっ！」

爆発的な快感の大波が、全身をさらい、はるか高みへと持ち上げられる。

(ああっ、これが、これが)

だが、到達しない。なにかがセリシアの飛翔をはばんでいた。ヴァーラの言う絶頂が、すぐ眼前に来ているのに、あとほんのわずかな距離がつめられなかった。泣き神輿に休みなく責められているのに、厚い天井にぶつかつたように上へは行けない。

「あっ、ああ……なんだ……」

自分の生理に反する現象に困惑するセリシアに、ヴァーラの言葉が聞こえた。

「はあい、皆様、ちよつと泣き神輿を止めてください。セリシア様とお話がありますのよ」  
たつた一日でどうやって獰猛凶悪な囚人たちの心を掌握したのか、ヴァーラの言葉に従って泣き神輿がびたりと止まった。静止した神輿の上で、セリシアはようやくひと息つけた。後手縛りの身体を、ぐつたりと前に倒している。

「ほほほほ。絶頂を迎えられなくて、残念そうですね」

セリシアは汗にまみれた顔を傾け、ヴァーラをにらみつけた。

「違う。うっん、そんなことはない。きさまの言う絶頂など、はあんっ、わたしはいらない」

「それは、よかつたですわ。泣き神輿に乗っている間は、セリシア様は絶頂を迎えられませんが。ヴァーラのヤグンゾマエナ・コーサササソーセスの媚薬成分で高ぶつた女の

肉体は、精液を体内に吸収しないかぎり、絶頂には達しませんのよ」

「きさま、さつきは媚薬の疼きを止めるために、うう、体液が必要だと」

「ええ。何人もの男の体液をたつぷりと身体の中に入れていかぎり、疼きは治まらないのですわ。それと同時に、絶頂にも達しない。いい組み合わせでしょう。セリシア様がそのまま泣き神輿に颯られていると、快楽と疼きがどんどん高まっていくばかりで、解放されることはありませんのよ」

「な、なんのことだか、くうっ、わからん」

「ほほほほ。すぐに思い知りますわ。イキたくてもイケないつらさが。ふふふ。ヴァーラもガルチク様に味わわされたことのある、女の最高の地獄ですわ。セリシア様もすぐに囚人の殿方たちに、本物の男根で貫いて、射精してくれと懇願するようになりますわ」

「あ、ありえない。ああ。わたしが、そんなことを言うはずが、あっんん、言うはずがないっ！」

「セリシア様がいつまで意地を貫けるのか、ヴァーラも楽しみにしていますわ。せいぜい、がんばってくださいませね。辺獄砦の殿方も、気合を入れて盛り上げてくださいね。さあ、泣き神輿の再開ですわ」

声音だけで男の下腹部を硬くさせるヴァーラの声援を受けて、再び泣き神輿をかつぐ囚人たちの意気が上がった。

「それ！」

「それ！ それ！」

「それ！ それ！ それ！」

「セリシア隊長のお通りだあつ！」

泣き神輿の動きが一段と苛烈になり、三角柱の上でセリシアは首がはずれそうなほど全身を揺らされてしまう。

「あがつ、ぐはあああつ！」

冷たい男根を呑んだ肉孔から、熱い蜜が後から後からあふれ出る。まるでセリシアの魂を溶かして、木造肉棒に吸われているようだ。陰核も今にも内側から破裂しそうなほどふくれ上がって、ズキズキと猛烈な勢いで脈動している。

（飛ばされる！ ああ、どこかに飛ばされてしまおう！）

何度もセリシアは切実を感じる。だが、飛ばない。背中に翼が生えて懸命に羽ばたいているのに、手足に重い鉄の鎖がつながれているようだ。身体は痛いほど飛び上がろうとするのに、地面から離れられない。

望まぬ快感を押しつけられながら、その頂点にはたどり着かせてもらえなかった。そんな状態がずっと連続している。

息がつまるほどの憔悴感が、十四歳になった身体を蝕み、魂にキリキリと食いこんだ。

「くっ、うあつ、ああおお」

（耐えろ。耐えるのだ。奴らもいつかは疲れて、あきらめるはずだ）

セリシアは快樂の狂熱で沸騰した意識で、何度も何度も言い聞かせた。実際には、泣き神輿をかついでいる囚人たちは次々と入れ替わって、休息をとっているから、動きが弱まる様子はなかった。たとえ、すべての囚人たちが疲れはてて、泣き神輿のかつぎ手がいなくなっても、セリシアの肉体の疼きは消え去ることもないはずだ。

現実を無視して、セリシアは念じつづけた。

（耐えろ。耐えつづける。いつかは、いつかは終わる……）

「はああうっ、んくうっ、ああおおっ……」

少女の喘ぎ声も、囚人たちがあげる蛮声にかき消されて、砦の背後にそびえる辺獄の防壁に呑みこまれていった。

※

「……おお、あああ……んん……」

泣き神輿に乗せられてから、どれほどの時間が過ぎたのか。セリシアには考えることもできなくなっていた。揺れつづける三角柱の上に、ぐったりと上体を倒している。

ヴァーラが再び泣き神輿の動きを止めさせた。とがった頂点に頬を食いこませたセリシアの顔に、女魔道師の艶然とした笑顔が近づいた。



尻がぶるっと震えた。尿管が完全に外へ出るとともに、小便を漏らしたように二筋の白濁液がベッドを濡らした。外に出た尿管は長さを縮めて、柔らかい鎧の内側に姿を隠した。体内から尿管を排出した快感に震えるセリシアの尻たぶが、ガルチクの指につかまれた。強烈な握力で尻肉を左右に広げられる。

「はんっ、 ああっ……」

あらわにされた女の秘部に注がれる視線を、セリシアは触感として認識した。感じるはずのない灼けつくような圧力を、柔らかい肌に刻みこまれる。王の視線に応えて、女肉が歓呼の涎を滴らせた。

「これがグラルダン王国最強の女騎士の牝の花か。二十日前までは処女だったというのに、ずいぶんと熟れておるではないか。よほど囚人たちに鍛錬されたようだな。すべてが淫らに色づいておるぞ」

「ひああっ！」

予想外のところに、予想外の刺激を受けた。ガルチクの口が、セリシアの肛門に密着してきたのだ。

「な、なにを」

肛門をいじられるのは初めてではなかった。囚人の中には女の尻に執着する者が何人もいる。訓練と称して、ヴァーラの指で何時間も肛門から直腸までをほじくったこともあつ

た。だが国王となった男が、いきなり不浄の穴を口ですすつてくるとは思いもしなかった。ガルチクの舌がすぼまりを割って、肛門の内側に入ってくる。指のように力強い動きで肛門の裏側をなでまわされると、またすばやく引き抜かれた。

「ひいっ、ああああ……」

「ほう。セリシアの尻は、いい味がするな。あのベデュートという魔道師が作った味か」

（尻の味を品評されるなんて、恥ずかしすぎる）

尻へ向けて語られる言葉に、セリシアは身悶えする。だが、再び肛門に口づけされ、内側の粘膜を舐めしやぶられ、腸に残っている白濁液を吸い出されると、もうなにも考えられなくなった。

「あひっ、はっあんん、あああ」

息もつけない肛悦の業火が、尻の中で燃え盛った。快楽が灼熱の鉄の杭と化して、直腸から脳天まで一気に貫かれる。

「あふっ、ふおおああ、だめ、もう、あおおっ！」

少しでも深く喜びを得ようと、セリシアの尻が勝手に蠢き、肛門をガルチクの口へと押しつけていく。陵辱者の舌も応えて、さらに激しくくねり、奥へ奥へと進撃した。

「尻っ、尻、尻が、わたしの尻が、燃える、はああっ、燃えつきてしまおうっ！ はおおおうっ!!」

全身の力をこめて尻がガルチクの顔に押しつけられたかと思うと、次の瞬間、高々と跳ね上がった。

「ひいいいつ、イク、イクつ、尻でイッチャううつ!!」

肛門から白い粘液をあふれさせ、唇を陶酔の涎で濡らして、セリシアはベッドの上に身を投げ出した。顔をシートに押しつけ、手足をひくひくと泳がせて、どっぷりと快樂の泥沼に身を浸す。自分の身体の中に、血液のかわりに淫蕩な汚泥が流れている思いがした。

「……はあああ……うんん……」

「尻を舐められるだけで絶頂に達するとは、いい牝になったものだな。女は、男から与えられる快樂に溺れる姿が最も美しいぞ。さあ、セリシアがよがり狂い、肉の喜びに踊る姿をもっと見せろ」

「ひゃうっ!」

セリシアの尻が軽々と持ち上げられた。待ち受けるように膣口と肛門が花のように開き、新たな涎を垂らす。

「ふふふ。セリシアの頭よりも、下半身のほうが理解が早いようだな。好きなだけ喰うがよい。わしの力をな」

縦に並んだ二つの肉孔に、同時に二本の亀頭が突っこまれた。

「はうあああっ!」

舌よりもはるかに太く熱い肉塊が、薄い粘膜を挟み、並んで突進してくる。ただ直線的に進むのではない。小刻みに振動して、セリシアの充血した肉壁を揺るがせる。二つの振動が身体中に伝播して、細胞のひとつひとつが沸騰する。無数の快感の泡が生まれては、ぶちぶちと弾けて、セリシアを普通の男からは絶対に与えてもらえない快樂の淵に沈めていく。

「あつ、あああ、すごい。すごひい。たまらないっ！」

少女となったセリシアをおもちゃにしていた囚人たちも、今のよがりのたうつ女騎士を目にすれば、嘔然とするはずだ。自分たちがセリシアを本当には責められなかったことを思い知らされ、齒嚙みするに違いない。

それほどセリシアは仇敵の男に犯される法悦を全身で満喫し、全身で表現していた。今やセリシアには、辺獄砦もグラルダン王国も存在しなかった。体内で暴れる男の肉触手だけが、世界のすべてだった。五感のすべてを埋めつくし、塗りつぶす快感だけが、セリシアのいる世界そのものだった。

「あつ、はあひゅつ、だめ、すごすぎて、ほああ、もうイッてしまおうっ！」

生涯に体験したすべての喜びを合わせたよりも、悦びが大きかった。剣を握る爽快感、戦場での勝利の高揚、勲章をたまわった名誉、そのすべてを積み上げても、ガルチクから与えられる肉の快樂のほうがはるかに強烈だ。快感が肉体の許容量を超えているために、

セリシアには一日中も犯されつづけているように思えた。

実際には、二つの肉穴を怪物男根に貫かれてから、ほんのわずかな時間しかたっていない。膣と腸を、蠢く肉蛇でいっぱい埋められてから、セリシアの肉体はたちまち絶頂へと駆け上った。陵辱されつづけた二十日間でも一度も到達したことのない歓喜の高みへ連れ去られる。

「受ける、セリシア」

ガルチクの声は、またもや女を責めている最中とは思えない冷静なものだった。セリシアの反応を的確に見極めて、意思の力で完全に制御した射精の矢を射る。

「うあつ、あああつ！」

二連の燃え盛る火矢が、セリシアの体内に放たれる。隣接する粘膜の洞穴が、濃厚な精液の奔流に満たされた。女騎士のすべての感覚が、射精された喜びに打ち震える。

「イクっ！」

光が見えた。

「イクッ、イクうっ！」

天上の神々の宮殿に満ちているという白い光輝が、セリシアの視界を覆いつくした。

「イククうううううっ!!」

熱い白光のなかに包まれて、セリシアの肉体が粉々に弾け、飛散した。

「あああおおおおおおううううつつ!!」

艶やかな悲鳴が長く尾を引いて、寝室に反響した。

「ううう……うっ、う……ううう……」

悲鳴が途切れ途切れになり、やがてかぼそい吐息となって波打った。セリシアの全身の筋肉が弛緩して、再びシーツの上に死体のようにうつぶせに横たわる。

ガルチクが射精を終えた二本の男根を騎士の女肉に挿入したまま、両手の指でセリシアの汗まみれの背中をゆっくりとなぞった。顔つきは冷徹で傲慢なままだが、指の動きには奇妙に情愛がにじんでいた。

「おまえの身体にわしの刻印をつけるために、全開で果てさせるぞ。三王女によくやるようにゆったりと、一晩中絶頂寸前で焦らしぬいてやってもよいが、今はイカせつづけてやるからな」

「……あ、ああ……」

セリシアは朦朧とした意識のまま首をひねり、声が聞こえるほうへ顔を向けた。ガルチクの唇に愉快そうな笑みが現れる。

「わしがくれた絶頂の余韻にあつて、なお他者への注意を怠らぬか。戦士としての習慣が身に染みついて、抜けぬようだな。かわいい女だ。まさに鬨り甲斐があるというもの。さあ、また果てさせてやる。覚悟しろ」

「ふあっ、あああっ！」

セリシアの力を失った裸体がぐいと起き上がった。しかし、手足はだらりと垂れたまま  
で、糸の切れた操り人形の状態だ。とても自分の身体を支える筋力はなかった。

ガルチクの両腕もまた、女体には触れていない。両手は胸の前で組んでいる。なんと、  
セリシアの股間に収まった二本の男根のみで、大柄の女騎士士の体重を持ち上げたのだ。

「あっ、な、なに!？」

異変に気づいたセリシアの意識が、現実呼びもどされた。そのときにはガルチクの腰  
の上で二本の肉蛇がよじれて、セリシアの身体が半回転していた。ベッドに仁王立ちする  
ガルチクと対面させられる。

「この体位は……」

子供にされたセリシアが、ゾーゲムに陵辱され、処女を強奪されたときの体位だ。まだ  
肉の快楽も、被虐の愉悅も知らないで、ひたすら激痛のみの体位だった。

「あ、ああ……」

「怖いのか。ゾーゲムとやりに女にさせられた体位だからな」

「どうして」

「知っているか、というのか。セリシアが犯される姿は、ヴァーラが魔法の水晶で王都に  
まで送ってくれたからな」

「そんな」

セリシアは羞恥に顔を引きつらせた。裸よりも、苦痛に泣き叫ぶ姿を見られたのが、騎士としてつらい。今、こうしてガルチクの肉触手に貫かれ、身をゆだねていても。

「わしが実力を認めた親衛隊分隊長が、囚人どもによつて調教される様を見物するのは、王権を固める間のよい息抜きだったぞ。アミーナ王女も、憧れのセリシアがいじめられるのを見て、哀しんでおった」

「姫様まで、わたしの情けない姿を！ しかし、アミーナ姫様は、わたしを陥れる偽証をしたのに、どうしてわたしの心配などを」

「三王女は心底から、おまえを好いておる。ただ、わしの牝奴隷は主人の命令には逆らえぬというだけだ」

「姫様たちが、そこまで籠絡されていたなんて……」

「おまえも、そうなる」

セリシアの中で、再び二本の魔男根が強烈に動きはじめた。亀頭の突き上げだけで、女体がズンと持ち上げられる。

「ひっ、あひいっ！」

全身を膣と肛門だけで支えられる不安定さに、セリシアは思わず目の前のガルチクのたくましい上体に両腕をまわした。岩のような筋肉を束ねた背中に、指を立てる。素手で岩

登りをしているようだ。魔成獣の青い鎧が貼りついた豊乳が、ぶあつい胸板に押しつけられ、張りつめた乳肉が左右にはみ出た。

「あふっ、む、胸が、いいっ！」

セリシアの昂りに反応したのか、胸鎧の内側の生きた肉が波打ち、たわんだ乳房を揉みたててくる。左右の乳首も鎧にきつく吸い上げられ、極限まで勃起させられた。血が噴き出るほどに充血して、震えるような疼痛を脈打たせる桃色の肉筒が、魔肉に包みこまれて、こりこりとねじられる。

「おんんっ、乳首っ！ ちくびいいいいっ！」

左右の胸を同時に男に啜えられ、乳輪をしゃぶられ、乳首を歯でしごかれているようだ。それどころか、普通の男では不可能な繊細で過激な乳責めが連続している。

「た、たまらない、ああっ、気持ちいいっ」

乳房に加えられる人外の愛撫と共同作戦を遂行するかのようになり、膣の中で亀頭が振動をくりかえし、尻の奥で肉蛇が鎌首を振りたくった。

「んっ、んんっ、くふうっ」

セリシアの両脚が自然に上がり、陵辱者の腰に巻きついた。無意識の動作だけに、手加減なしにガルチクの脇腹を締めつけている。並の人間なら息がつかまるどころか、内臓がつぶれる豪力がガルチクの胴体にかかった。グラルダンの新王は平然とセリシアを犯しつづ

けている。

「セリシアが、このわしにすがりつくか。いい気分だぞ」

「あつ、ああ、も、もうっ、胸が、胸がああ！」

セリシアの身体が、木の幹で脱皮する虫のように背後に大きくのけぞった。ひしゃげていた巨乳が弾み、もとの形にもどる。張りつめた乳肉の勢いに押されたように、胸に貼った鎧が柔軟化して、まくれ上がった。

ガルチクの目の前に、乳輪と乳首が露出した。人差し指の先ほどの大きさに肥大して、ガルチクの顔へ向かってまっすぐに屹立している。

「ふわあつ、乳首が、出るっ！ なにか、出るううっ！ ほおおおっ!!」

汗に覆われた乳房全体が、さらにひとまわり大きさを増した。先端の乳輪がぷっくりと盛り上がり、限界まで勃起したと見えた乳首がさらに長さを伸ばす。

「こおおおっ!!」

ぶるっ、と双乳が振動した。のけぞったセリシアの首が左右に振りたくられる。

「出るうううっ!!」

乳首の先端から、白い液体が噴出した。母乳ではない。広場で秘孔と肛門から飛び出したものと同じ、魔の鎧の分泌液だ。

やはり男の射精を上まわる放出の快感が、乳房の奥から乳首の中を廻り、先端からほと

ばしる。左右の乳首から同時に出た白濁液は止まろうとしない。男の射精ならとつくに終わる時間が過ぎてても、乳首は震えながら淫らな粘液を出しつづけている。

「ひっ、イクっ、胸でイクっ！」

セリシアの尻が小刻みに震え、ガルチクの腰にからめた両脚がさらに強く締まった。膣と肛門が一気に収縮して、男根を食いちぎろうと噛みしめる。二つの肉洞も快感の頂点で爆ぜた。

「ああおおっ、またイクっ、前も後ろもイッてしまう。胸も、尻も、膣も、イクっ！みんな、みんな、身体中イククううううっ!!」

ガルチクが両腕で、のけぞるセリシアを抱き起こした。まだ放出を続ける豊乳が大胸筋に押しつけられ、再びひしゃげた。密着する男の胸板と女をつぶれた乳肉の隙間から、四方へ白濁液が飛びちる。

セリシアは王の豪腕に抱きしめられたまま、自分から乳房をこねるように身体を動かしはじめた。乳房と胸板に挟まれて折れ曲がった乳首が、強くこすりたてられて、快感の質がいつそう深くなる。

「はあああっ、イク、イクのが止まらない、イッんん……」

持続する絶頂を訴えつづける口が、ガルチクの口にふさがれた。すぐさまセリシアのほうから舌を伸ばす。新たな刺激を求めて、王の力強い舌にからませると、つながった口の



中で濡れた水音が連続した。

「むんんっ、うぶ、あむんんん……」

絶頂に飛翔したまま交わす口づけが、これほどの快感をもたらすとは思わなかった。セリシアはさらにガルチクの舌を求め、砂漠の遭難者よりも懸命に王の唾液を飲み下した。

夢中で相手の口を吸うセリシアの赤い髪が、むんずとつかまれた。背後に顔を引かれ、強引に口を剥がされてしまう。セリシアは二人分の唾液が垂れる唇で、欲望の声を叫んだ。

「もつと！ もつと口づけを！ ああ、唾を飲ませて、うっぐんんん」

開いた口の中に、三本目の亀頭が押しこまれた。再び、喉の奥へ肉触手が潜りこんでくる。セリシアの喉、膣、尻と、三つの肉穴という肉穴を、ガルチクの魔男根にふさがれつくした。

「むっんんん、んうっ、んぐぐふふふ！」

三つの亀頭が、同時に灼熱の精液を吐き出した。セリシアの身体中を、ガルチクの精液が駆けめぐる。セリシアの体内から血液を追い出し、かわりに精液を循環させようという勢いだ。

「むっんんんん!!」

イクと言葉を出せないまま、さらなる高みへと追い上げられる。乳首から大量の白濁液が放出され、ガルチクとセリシア自身を白く染めた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**